


様式第1号（第4条関係）

平成29年7月12日

病院長選考会議議長 殿

推薦代表者
病院長選考会議の委員

守山正胤 

病院長候補者の推薦について

国立大学法人大分大学医学部附属病院長の選考に関する規程（平成29年規程第47号）第4条の規定により、下記の者を別添病院長候補者推薦書のとおり推薦します。

記

病院長候補者（自署）

門田淳一



病院長候補者推薦書

(ふりがな) 氏名 (年齢)	もりやま 守山	まさつぐ 正胤	(61 歳)
現 職 (又は最終職名)	大分大学医学部長		
<p>推薦理由</p> <p>大分大学医学部附属病院長に本学理事の門田淳一氏を推薦します。</p> <p>本学附属病院の最大のミッションは、大分県民の命と健康を守る医療人を育成し、県内医療機関へ送り出すことです。新臨床研修制度が導入された平成 16 年度以降、大学に残る医師が減少して大学病院が地域で果たしてきた医師派遣機能が低下しました。それに伴い、地方から都会へ、僻地から中核都市へと医師が流出して、結果として深刻な医師偏在に見舞われています。本学附属病院の状況も同様であり、大分県の僻地拠点病院への医師派遣も次第に維持困難な状況がおこっています。このような状況に加えて、平成 30 年度からは新専門医制度が開始される予定です。本制度は医師の質保証を目的としたものですが、必ずしも大学に入局する医師が増えるとは限らず、本学に入局する医師も逆に減少する可能性すらあります。</p> <p>したがって、本学附属病院の喫緊の課題は如何に大学に残る医師を増やし地域医療を守るかにあります。今こそ卒前卒後教育を改革して卒前から卒後初期研修そして後期研修へとシームレスな人材養成に注力しなければなりません。本学附属病院の取り組みは、他大学に比べて十分とはいえません。このような危機的な状況にある附属病院の病院長に求められる基本的資質は、人の話をよく聞く度量と相手を説得できるコミュニケーション能力であり、その能力を支える高潔な人格です。そして教育者としての視点で医師達を指導できる人間力が必要です。門田先生は教授会構成員ならびに病院内の教職員の人望が厚く、周知を集めて困難を乗り越えることができる方であると思います。そういうことから教育機関としての附属病院の病院長としてふさわしいと思います。また、病院長は大分県内の地域医療への深い理解と貢献が求められますが、門田先生は臓器別に再編された内科学講座をまとめ上げ、内科運営委員会を作られ、県内の医療機関への医師派遣を講座の枠を越えて話し合い効率的配置ができるようにされました。これは、今後、大分県、県内自治体、地域の病院ならびに医師会と話し合って地域の医療を守るしくみとして発展することが期待されます。門田先生は地域医療を守る附属病院の病院長としてリーダーシップを発揮できる人物であると思います。</p> <p>一方、大学病院で続発した医療事故を契機に医療安全の重要性が指摘され、医療法改正が行われています。そこでは特定機能病院の病院長には医療安全の業務の経験と知識が求められています。門田先生は医療安全ならびに感染制御に関する経験が豊富で、特に本学附属病院で長年感染制御部長を務められました。医療安全重視の観点からも門田先生は病院長としてふさわしいと思います。また、病院長の権限と責任の明確化がもとめられていますが、これは病院長が周囲から尊敬され、信頼される人物であって初めて実現することです。まさに門田先生のような人格者であれば求められているガバナンス改革が病院中に行き渡ると信じます。</p> <p>また、附属病院は、医学研究機関でもあります。門田先生は呼吸器感染症の専門家として多くの研究成果を発表してきた研究者であり、今後附属病院における研究の活性化に力を発揮できる方であると思います。</p> <p>最後に、現在本学附属病院は病院再整備の途中にあります。これは故野口隆之病院長が心血を注がれた大きな事業です。次期病院長はその総仕上げをする役割といえます。門田先生は故野口先生のもとで副病院長を務められ、その類い稀なリーダーシップを学んでこられました。これからの数年間は病院経営の観点からも厳しい時期を突破していかねばなりません。さらなる経営環境の向上には自らが泥をかぶり責任を果たす厳然とした覚悟が必要です。私は、門田先生はすべての人々の信頼を勝ち得て、附属病院の運営にリーダーシップを発揮できる人物であると確信し、病院長候補として強く推薦します。</p>			